

〔論文〕

日本の保守主義をどう構想するか

——三宅雪嶺と国粹主義の失敗を参考に——

荻原 隆

名古屋学院大学名誉教授

要 旨

日本において、久しく保守主義がうまく構想できなかったのは、伝統の側にはなく、思想者の側に責任がある。実に長い間、思想者は日本には神、仏、あるいは、天、道、理、アイデアや形相、自然法（権）やそれを前提に導出される自由や平等のような原理が日本の伝統の中に見出されないことをもって、伝統主義という意味での保守主義の形成が不可能であると思っていた。しかし、それは規範的原理を一種の立体的原理でなければならないと信じる思い込みからくる錯誤である。この錯誤はこれらの立体的原理が大陸という広大な空間を持つ諸国にのみ発生したものであることを忘れていることに由来する。ところが、日本は島国であるからこういった原理を構想することが無理なのである。しかし日本には自然環境と民族的環境において一万年を超える平和な歴史を有してきた。この歴史的経験に即して、時間的な原理で保守主義を構想することは十分に可能である。

キーワード：国粹主義，三宅雪嶺，津田左右吉，立体的原理，時間的原理

Why did Japanese nationalism fail

——The case of Miyake Sesturei——

Takashi OGIHARA

Professor Emeritus
Nagoya Gakuin University

一 序論

すでに書いてきたことだが¹⁾、日本において伝統主義という意味での保守主義が成り立たなかったのは、伝統の側の責任ではない。もちろん日本の伝統にはさまざまな欠点が存在するが、それはどこの国でも同じことである。日本の伝統の大切さというようなことが久しく言われながら、保守主義がうまく成立しなかったのは、津田史学を決定的例外とし、思想者・研究者の側に伝統に対する認識や評価、またその両方に大きな錯誤や思い込みが存在するからである。本論は、そのうちの三点を取り上げて、これまでの考察をさらに深めてみようと思う。

長年、多くの思想者・知識人たちは日本には道義・倫理の中核になるものが確立されていないことを嘆いてきた。この負の意識を見事に定式化したのが丸山真男である。それは、我々の精神の根本病理は、①世界宗教もしくは普遍的原理がない、そこで、②神の意図や崇高な理念を実現しようとするような主体性・意志性が乏しく、状況にズルズルと引きずられてしまう悪癖がある、というものである。丸山政治学の登場以降、知識人はますますこのような公式に沿って思索研究するようになっていった。細かく言うと丸山以前は①が、そして丸山の登場とともに②が強調されるようになったと思う。その影響はアカデミズムに限らず、ジャーナリズムでも深い。この偉大な政治学者に批判めいたことを繰り返してきたので気が引けるが、しかし、その公式には日本の伝統に対する大きな錯誤ないし思い込みが①と②につきそれぞれ少なくともひとつずつある。まずこの二点から考えてみよう。また、思い込みの例として明治の国粹主義者三宅雪嶺の著作を引用しようと思う。

二 立体的原理と時間的原理（①について）

多くの思想者・研究者や丸山が世界宗教とか普遍的原理を思い浮かべられる場合、もちろん、それはユダヤーキリスト教の神、中国の天や道、後には理、またはその内容たる仁義、インドの仏や法（ダルマ）、イスラム教の神などを念頭に置いているし、あるいはギリシャ哲学のアイデアや形相、そして西洋の自然法や自然権（とそこから派生する自由平等）を想定している。神や仏は人格的な規範原理であり、道やアイデアや自然法は非人格的原理、中国の天は後者の性格にやや前者の性格を加えたような原理であるが、いずれも時間と空間を超越した原理であり、宇宙自然を横に切断したような人格や原理が世界の上にあるいは内奥にあって万物を支配し、原則となるという考え方である。イメージとしては空間的であるが、ただ、空間的と言うと、超時空的という表現と矛盾するから「立体的」と形容するのがもっとも適切であろう（この言葉は藤原保信先生が会話の中での使用されていたものであり、本稿もそれに触発されたところがある²⁾）。西洋思想史研究者ならすぐにユダヤーキリスト教やアイデア・形相というギリシャ哲学、そして両者を統合した自然法などを思い浮かべられるであろうが、この立体的原理という考え方は西洋のみならず中国にもインドにもイスラム圏にも拡張できる。そして、宇宙自然を横断するような規範的原理が日本には存在しなかったことに丸山以前の思想者も以後の研究者も強いコンプレックスを抱いてきたのである。

しかし、これらすべての原理は大陸諸国家・諸民族で発生しているという明確な特徴がある。それ

は大陸の諸民族が常に広大な天地を強く意識せざるを得なかったからである。そこで空間的というか立体的な原理が発生したのである。もちろん、立体的な原理といえどもある状況のなかで生まれたものであるから、その意味では時間的・歴史的存在である。また、神であれ、ギリシャ的原理であれ、長く信奉されてくればそこにおのずから時間性や歴史性が伴う。しかし、原理の性格自体はどこまでも空間的・立体的である。

また、これらの神や自然法（権）というような原理の形而上学性・先験性を克服しようとする努力もなされた。功利主義やそれを批判するロールズの正義論はともにより経験的・論証的な特徴を持ち、その点で大きな成果を上げたが、しかし、前者は人間が快樂・幸福を追求し苦痛を避けること、後者は損や最悪の事態を回避しようとするという言わば不変の、時空を超えて妥当と思われる人間性の一般則を前提とし、そこからそれぞれ最大多数の最大幸福、あるいは自由・平等と社会保障という正義の原理を導出する立体的な論理構成において西洋、広く言うと大陸諸国家の伝統を継承しているのである。功利主義者やロールズはもちろん思考の進歩という時間的発展を認めていたであろうが、それはより優れたやはり立体的な原理が発見あるいは構想されることによってであるとなんとなく考えていたであろう。それは彼らの発想の仕方から類推できる。

しかしながら、日本の保守主義を構想しようとする場合、この立体的原理を追いかけたり、その欠如を嘆いたりしては必ず失敗する。こういう原理は広大な空間を有する大陸の諸国家特有のものだからである。大陸から相当距離が離れた島国日本にそういう原理がないのは当たり前である。恥でもなければ、嘆きの対象でもない（自分と違う発想を学ぶことに意義はある）。島国ではほぼ単一民族というこの国は立体的構想力を苦手とはするが、特有の歴史・時間が流れている。それは大陸とは違って、格段に非武力的・平和的であったということである。津田史学がこの点を見事に解明しているが、一例を挙げると、たとえば日本の建国の過程は格別に非軍事的・平和的で、他の民族や人種の殺戮や排除もしくは奴隷化やカースト化がなかった（この点で海峡の狭いイギリスは日本と違って多くの異民族が次々と侵入してきた大陸系島国である）。人種民族にまつわる何百年・何千年という怨恨と憎悪をすべて大陸諸国は現在でも経験しているのであるが、島国日本だけは例外である。そして、日本は奈良平安と対外戦を経験しなかった。平和になれば、遊興に耽った貴族は武備を怠り、武士の台頭を許したが、しかし、結局最後にはその武士（戦士）によって世界に比類のない太平の世が築かれたというパラドックスもよく知っている。また、戦後日本が平和国家として歩んできたのは先の大戦を深く反省したからであるが、同時にもともと好戦的ではないという本来の姿に立ち戻ったからである。あるいは、日本の文学はやや女性的な抒情詩（文学）、芸術理念で言うと「もののあはれ」の系譜に傑作が多く、叙事詩には少し弱い、これも平和性の産物である。また、中緯度に位置し、島国の海洋性と政治文化の中心であった特に西日本の自然がすべて小規模でおだやかであることも平和な時間の流れを作り出した。こういう自然環境も大陸にはない。日本人は弥生時代はおろか縄文時代からこの特有の自然環境と民族環境の中に生きてきた。民族精神は絶えず変化するから無理に固定した核心のようなものを想定する必要はないが、もし本質的要素があるとすれば、おだやかなところ、温和な気風であるとも考える以外にはない。

したがって、この時間の流れに着目すれば平和主義³⁾という形で保守主義を構想することは十分に

できる。ところが、日本の思想者は常に中国ついでインド、そして西洋の立体的原理を追いかけてきたから、自分自身の特有の歴史性・時間性が豊かな普遍化可能性を持つことに気付かなかったのである。この意味のないコンプレックスが保守主義の成立を阻んだ大きな、おそらくは決定的な要因である。

明治の国粹主義者三宅雪嶺には『我観小景』（明治二五年）、そしてこれを敷衍拡大した『宇宙』（同四二年）という著作がある。『宇宙』の内容は題名どおり気宇壮大で多少茫漠としているが、宇宙に無限の進歩、究極の円満調和を促すような漠然たる意志のようなものを認め、歴史は逆行を繰り返しながらも、それも進歩の契機であり、必ずや宇宙の目的に添って、真善美の理想に到達するに違いないと述べたものである。

「宇宙に智力あり焉。夫能く道理に通じ、能く道理に従ひ、能く道理に忤はざる、是を人に智力ありとは謂ふ也。今我れ宇宙を観る、往くとして道理に背馳するを看ること無し。（中略）宇宙の事、真に道理に由りて充足され、道理に忤ふ者未だ嘗て之あらず。（中略）宇宙に意志あり焉。」（『我観小景』—「宇宙は身体と均しく心意あり」⁴⁾

「人生観に専らなる者が人生に目的ありとするは勿論、更に大観する者は人事と物象と程度の差なるを想ひ、宇宙の一部若くは全部に目的ありとするに傾く。（中略）楽観する者は宇宙を以て円満に調和すとし、悪が善の爲め、醜が美の爲め、偽が真の爲めに存する、恰も谷愈々深くして山愈々高きが如きもの、悪醜偽は其れ自ら悪醜偽なるに非ず、唯だ善と美と真とをして愈々發揮し得せしめんとするの外あらず、今日欠陥の多きは善真美の未だ大に顕はれざるのみ、漸を以て善尽し美尽し真尽すの域に到らんと説く。（中略）宇宙の目的の何たるかに関し未だ全く想像の及ばざる所あり、究極の如何を考えざるの穩かならんも、常情を逸せざる者は楽観もし悲観もし知らざるを知らずとしながら、部分的に真に美に善に遷るを認め、全体として亦た然るを認めんとす。或は狭き範囲に於てし、或は広き範囲に於てし、且つ其の何事にして何故なるかを明言し得ざるも、爾かく認めざれば安んずること能はず。」（第一九一節⁵⁾

この時代こんな形而上学にどれほどの意味があろうか。また、逆行も進歩の契機で済ませているところに雪嶺の理想主義めかしながら、その実、状況主義者であることがよく見て取れる。逆行が進歩の契機になることもあるが、そうならないことも、また、たんなる逆行・進歩の契機と片付けるにはそこあまりに大きな犠牲を伴うことが歴史的事実として多いのだから、真の理想主義者ならここでもっと苦悩・葛藤があり、深く考えるであろう。それを簡単に済ますところに理想の底の浅さが出ている。外から見ると自己欺瞞なのであるが、雪嶺は自分をあくまでも理想主義者だと思い込んでいたようである。

そして、国粹主義の観点からすると問題は規範的原理は立体的（空間的）でなければならぬと相変わらず信じ込んでいるところにある。宇宙に漠然たる意図のようなものを想定し、それが人間世界と間接的ながら深い相関関係を認めている点で、原理性に多少人格性を混ぜた中国の天を想起させるが、

このような立体的原理を構想したところで国粹主義にとっては何の意味もない。国粹主義は日本の独自性から普遍化可能性を探求する思想である。宇宙空間に横たわる原理のような、漠然たる人格のようなものを想定したところで、国粹主義の成立にはまったく裨益も貢献もしない。いやむしろ、雪嶺は日本独自の伝統を普遍化できなかったから、宇宙的原理の探求に逃げ込んだのである。と同時に、多くの思想者と同様に原理と言えば立体的なものである、空間的でなければならぬと考えているからこういう形而上学のような代物ができるのであるが、それは思い込みである。

三 病理と長所の互換性 (②について)

我々がある国家社会の全体を評価する場合、良い点も悪い点も両方を検討しながら判断を下す。これは言うまでもないくらい当たり前のことである。たとえば、アメリカは日本よりもダイナミックでエネルギー豊かな国であり、それは人種の多様性からもたらされるところが多分にあるが、しかし、人種間の対立や憎悪は根深く、凶悪犯罪も頻発する。中国の経済発展は驚くべきものがあるが、それは全国民を徹底的に監視し、管理統制するという独裁制から来ている。したがって、アメリカのダイナミズムを手放して褒めるわけにはいかないし、中国の経済発展を単純にすばらしいと言うのもおかしな話である。ある国家社会を見る場合に、良い点も悪い点も考える、というよりも良い点と悪い点は相互に裏表の関係、一体なのである。この点に注意を払わず、ある文明なり国家なりを総合的に評価することは不可能である。こんなことはよくよく分かっているはずなのであるが、日本を評価する場合、これができなくなる。

普遍的原理の欠如から丸山の言うように②「日本人は主体性・意志性が乏しくズルズルと状況に引きずられる傾向が顕著である」ことを認めるとしよう。ところで、長所と欠陥は一体であるということとはほぼ真実であろうから、この命題を挟んで演繹すると日本人は温和で平和を愛する傾向が強いという結論もまた導出される。自己主張を抑え、周囲と協調しようとする人は時に状況に引きずられ、意志性には欠ける、いい意味では（悪い意味でも）平和主義者である。このこともまた認めなければならない。これは丸山や多くの思想者にとって思いもかけなかった帰結であろうが、論理的にはこうなるのである。そして、この帰結は総体として日本史を評価した場合の結論とも一致する。

ところが、近代主義者・進歩主義者に限らず、保守主義者にもこの互換性に対する認識は非常に弱い。三宅雪嶺は『真善美日本人』（明治二四年）の中で、一体日本人の本質的特徴がなんなのかわかりかね、一体何を誇るべきか相当に苦しんでいて、そこで、おそらく志賀重昂の影響を受けたのではないかと思えるが、美的才能を持ち出している。日本人は美を追究する任務があると。しかし、雪嶺は日本的な美の特色に満足していなかった。同書「日本人の任務 三」で「真成に日本美術の特色として指定すべきは、果して何かとする。荘厳か、時に荘厳なるものなきにあらざると雖も荘厳を以て特色となす、未だ其可なるを知らず。（中略）然らば則ち通じて以て特色と称すべきは夫れ輕妙の一語ならんか。要するに我国の美術や固より偉大宏壮なるものありと雖も、概するに手軽くさらさらとして輕妙に渉るの風ありとす。」⁶⁾と嘆いている。この日本の伝統美に対する批判の仕方志賀の影響を受けたように見える。

しかし、この美意識を発展させようではないか。それ以外に良い方法もない。

「かく我が美術品の概して輕妙に饒くして壮大に置ききは、抑も因由なしとせんや。蓋し国家久しく港を鎖して他国と交通せず、桃源、ユートピヤ、花自ら開きて自ら落ち、水長く流れて、鳥楽しく歌ふ。且つや其の山水たる、風光亦た自ら輕妙の趣あれば、国民の思想も自ら伴ふて輕妙に傾きしならんか。要するに輕妙は邦人が一箇の特質として言説するを得ん。稱して輕妙と云ふ、輕妙必ずしも敬重すべきの性質にあらざるも、美術上亦た一種の趣味を現はすことを得る者なれば、果して邦人の特質にして輕妙に傾きたりとせんか、益々此特質を發揚する、誰か之を得策なりとせざらんや。現に志那との貿易に於て輕妙なるかのブリッキ製の玩物、大に販売の望ありと云ふ。独り玩具に満足せず、益々輕妙の品物を出して広く宇内に伝播せしむるも、亦た事の宜しきを制する者に非ずや。」⁷⁾

雪嶺は日本が風土が輕妙（矮小）であることと太平安逸（鎖国）をむさぼってきたことを理由として美意識がどうしても輕妙に流れる、しかし、その輕妙さは細かい作業（玩具の製造）に向いている、これを伸ばしてはどうかと述べている。これは伝統の捉え方やその理由背景の説明としてかなり妥当性を持つ。細かい（繊細）な作業を売りにして貿易に勝てというのも良い指摘である。

しかし、問題は雪嶺が（志賀と同様に）日本人のこの特性に対して強い不満を持っていることである。この方向で思考を深めて行けば良かったのであるが、本作の続編たる『偽悪醜日本人』（明治二四年）の「醜」の部分で今の芸術家は小手先だけの美をもてあそぶと厳しく叱責していて、志賀の影響もすぐにはげてしまった（志賀も本音ではこのような特徴を嫌っていた）。日本の風土、とくに伝統がはぐくまれてきた西日本の自然はおだやかで、すべてが矮小であるから、どうしても美意識もチマチマとしてくる。天に聳える高峰も、無限の平原も、茫洋たる大河も知らないから、「偉大」とはほど遠い。そして、日本人は民族の興亡を経験したことがないから、どうしても安逸に流れる。

けれども、輕妙（矮小・安逸）を嘆いてばかりではそもそも国粹主義にならない。一体何のために国粹主義の看板を掲げたのか。日本人の矮小性・安逸性を批判しつつで良いから、そのおだやかさ・優雅・繊細性を新しい時代に新しい形で生かすことを考え続けるのが本来国粹主義であろう。日本人は矮小でチマチマしていて意志も弱い、それは温和性・平和性と表裏一体なのである。欠点に鋭い自覚や反省を伴いつつ平和主義という形で伝統主義を掲げることは十分にできたのである。国粹主義者ですらこうなのであるから、保守主義が成立しなかったはずである。

四 伝統の表層と本質

第三は多くの思想者が伝統の表層と本質を取り違えるという問題である。たとえば、武士道はよく日本の伝統精神の代表例としてあげられるが、しかし、武士は世界に類例のない二百五十年にわたる平和を作って武士道どころか、結果としては武士の存在も否定してしまったということになる。民族は複雑な要素を持ち、時代により多様な相貌を見せるから、相反する性格を示すことは当然でもあり、自然でもあるが、たとえばこの両者の性格はどういう関係に立つのか、あるいはどちらがより本

質か、それはなにゆえにかということを考えてみる必要がある。津田は一系の皇統（保守が「国体」、左翼が「天皇制」と呼称するもの—津田はこの呼称自体も学問的に認めていない）は民族の興亡の欠如という平和がもたらしたものであるという見事な分析を行っているが、こういう伝統の背景理由そして深部に迫る研究はまったくの例外である。日本の保守主義・伝統主義についての主義主張が底の浅いものにとどまってきたのはこの考察を欠くところに大きな一因があるが、雪嶺の場合もそうなのである。

雪嶺は理想主義から現実主義、武力主義に大きく転身するが、本人はそれほどの自覚もなく、両者をなんとなく混在させているのであるが（理想主義は世界に向かって訴えるものであるが、「アジアの開放」を目指して拡大する日本も気宇壮大であるから、両者を無自覚のうちに同一化してしまったようである）、日本人の捉え方も矛盾をはらみ、また時代状況によって大きく、そして簡単に揺れ動く。たとえば、『真善美日本人』や『偽悪醜日本人』は鎖国のせいで日本人は安逸をむさぼるようになった、小器用で矮小なのが日本人の性格であるとさんざん嘆いておいて、後年の『大塊一塵』（明治三七年）のような著作になると、特に「日本人の性質」「島国の悲観」の節で日本人を島国根性の持ち主というのは間違いである、海外に雄飛するのが日本人の伝統だという主張を持ち出し、太閤・高山右近・山田長政今にありせば、インドはおろか米・豪を征服しただろうと大風呂敷を広げているのだから⁸⁾、武力的進出も肯定していたと読める。そして、それを『想痕』（大正四年）・『小紙庫』（同七年）あたりから神武天皇の東征のような国体の神話と重ね合わせるようになる。たとえば『小紙庫』の「第一代天皇二千五百年祭」では、かつて記紀の内容にはそのまま受け取りかねる所があると述べていたのとは違い、事実としては疑問もあるが、教訓としては有益であり、日本が大陸に進出するのは皇祖の遺訓であるとしている。

「今日までの処、島帝国し、継続し来れること、実に東洋に先駆たる所以にして、六合の中心と言ふは強ち理なきに非ず。以て天業を恢弘し、天下に光宅すとは、当時国内を平定するの義なれど、之を拓むれば六合に及ぶべく、」⁹⁾

さすがに、これまでの理想主義からの転身には身に覚えがあり、多少気が引けたらしいが、最後に「十年、百年、千年、二千五百年、国勢愈々発展し、遂に紛争なく、戦争なく、四海兄弟、和気融々、真に文明を楽しむ彼岸に到らん。而も事に順序あり、最も脚下に注意し、然る後に漸次遠きに及ぶべし。」¹⁰⁾と書いて、権力主義もやがては平和円満に到るひとつの過程で済ましている。理想と現実の相克という問題の突き詰め方の甘さが露呈していて、雪嶺の思想を実に魅力に乏しい、味気ないものにしてている。

雪嶺は同論文の中で、日本は同じ島国でもイギリスが狭いドーバー海峡を挟んで大陸とすぐに対峙していたのとは違い、そこから比較的離れていたからこれまで攻めたり攻められたりが少なかったという重要な歴史的経緯にも言及しているのだから、この方向で小国なりに平和な豊かな未来を構想することもできたはずであるが、近代化がうまく行き始め、東アジアに進出の足がかりができると、六合に発展するのが皇祖の遺訓であり、今がその時だと唱え始め、この国体論の傾向を帯びた拡張主義

は敗戦まで続く。

雪嶺は『人の航路』（昭和一二年）の中の「汝の国家を知れ」（昭和四年二月）、「日本及び日本人の長所短所」（同一〇年九月）、「日本民族の自信」（大正一〇年一月）、「日本主義の真髓」（昭和八年一月）などの中で大陸との距離の関係から日本が民族の独立とまとまりや平和を維持してきたことを強く誇り、それを国体と漠然と結び付けている。皇室と臣民が征服・被征服の関係ではなかったため、両者の関係は親密であり、何人も天皇に反逆を企てなかった、これは世界に類例がない。民族としてのまとまりや平和と国体（一系の皇統）がどういう関係に立つのかさらに深く分析する必要があると思うが、この自負は一応肯定できる。

一方で雪嶺は典型的なアジア主義者で『人生八面観』（昭和三〇年）は日中戦争から太平洋戦争期に書かれた評論を集めたものだが、さかんに大東亜共栄圏を賛美している。しかし、日本が独自の歴史を歩んできたということとアジア主義とはまったく矛盾する概念である。日本独自の歴史経験を生かそうとするなら、東アジアに対して軍事的な深入りは避けつつ、国際協調を探るのが国粋主義者の本領ではないのか。

民族はさまざまな食い違う傾向性があるから、安逸で太平を好むのと、海外に積極的に打って出ようとする活動の両方があるもおかしくはないし、むしろ当然であるが、国粋主義者としてはその両者の性格なり伝統がどういう関係に立つのか、どちらがより本質的か、それはなにゆえにかということを考える必要があった。これは雪嶺に限らないが、多くの思想者がこの点を深く注意を払っていないため、伝統の表層と深部とを取り違える。雪嶺もその時々で状況に適合的な、たとえば近代化がうまくいくかどうか前途不安な時は日本人は矮小で安逸であると嘆き、近代化がうまく軌道に乗てくるととたん元気になって海外雄飛が日本の伝統であり宿命であると力み返るのである。真の保守主義者は状況の暗い時こそ未来に生かすべき伝統を示して国民を鼓舞し、近代化が成功しつつある時はその慢心を戒めるものでなくてはならない。状況に毅然と対峙してこそその保守主義であろう。雪嶺のご都合主義的、状況主義はその思想の権威をいちじるしく損なっている。

そして、伝統の本質と表層の関係について考えるべき事を考えていないのは怠慢であり、その結果、両者を散り違えるのは錯誤である。力に訴えても外に発展するのが日本人の本質であり、宿命であるがごとき主張はとうてい承服できないものである。雪嶺は玉音放送を聞いて軍部のしたことに愚痴をこぼし、その年に死んでいる¹¹⁾。同じく大東亜共栄圏をさかんに喧伝してきた徳富蘇峰は敗戦後の昭和二七年出版の『勝利者の悲哀』の中で「八 本来平和愛好の日本人」という一章を設け、日本人の汚名を雪がんと我々はもともと平和を愛好する民族であると力説しているが、時すでに遅しである。思想の振れ幅の大きさといい、本質と表層の取り違えといい、雪嶺によく似ている。

五 小結

日本には平和主義という形で保守主義を構想するのに十分すぎるほどの歴史があった。それがうまく形成されなかったのは、思想者が規範的原理の立体性と時間性について錯誤をしたり、伝統の病理と長所の互換性について失念したり、あるいは伝統の表層と深部についての突き詰め方の甘さや取り

違えというような失敗を次々に重ねていったからに他ならない。これらの錯誤に強い警告を発し、深い示唆を与えてくれる歴史学もあったのだが、それも忘却してしまった結果である。

注

- 1) 拙書『日本における保守主義はいかにして可能か—志賀重昂を例に』(平成二八年, 晃洋書房), 拙稿「保守主義はなぜ失敗したか—明治中期の保守主義者の場合」(『名古屋学院大学論集(社会科学編)』第五五卷第二号, 平成三〇年一〇月)。
- 2) 藤原先生がこう言われた時(本文中に記したようにこの「立体的」という観念は西洋・中国・インド・イスラム圏によくあてはまるのだが), 日本には別の発想がないだろうかという意味に解釈したのである。
- 3) ここに言う平和主義はたんに憲法第九条を墨守すれば良いという意味ではない。備えることも, 万やむを得ざる場合に戦うことも平和主義の重要な要素である。
- 4) 『我観小景』(明治二五年), 柳田泉編『三宅雪嶺集(明治文学全集 33)』(平成元年, 筑摩書房), 二六四頁。
- 5) 『宇宙』(明治四二年), 同, 一一八—一九頁。
- 6) 『真善美日本人』(明治二四年), 同, 二一八頁。
- 7) 同, 二一八—一九頁。
- 8) 『大塊一塵』(明治三七年), 本山幸彦編『三宅雪嶺集(日本近代思想集 5)』(昭和五〇年, 筑摩書房), 九二頁。
- 9) 『小紙庫』(大正七年), 同, 三〇八頁。
- 10) 同, 三〇九頁。
- 11) 三宅美代子編「年譜」, 前掲柳田編書, 四三九頁。